

# Glocal Tenri



5

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.5 May 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- 巻頭言  
聖と俗の分離  
／永尾 教昭…………… 1
- 「おさしづ」語句の探求 (46)  
「おさしづ」第6巻における個人の身上・事情の  
伺いと「道」  
／澤井 治郎…………… 2
- 日本語教育と海外伝道 (34)  
国際化の中での日本語教育⑤  
／大内 泰夫…………… 3
- 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌  
(新連載)  
プロローグ  
／山西 弘朗…………… 4
- 宗教伝統における聖典の意味構造 (6)  
儒学テキストの素読とその意義  
／澤井 義次…………… 5
- 遺跡からのメッセージ (69)  
大和の文化遺産を学ぶ⑦—一杵之内火葬墓の被葬  
者は誰か？  
／桑原 久男…………… 6
- イスラームから見た世界 (12)  
楽しく厳しいラマダーン (断食月) ③—祈りの  
夜とともに  
／澤井 真…………… 7
- 現代宗教と女性 (31)  
女性たちの保守運動との距離  
／金子 珠理…………… 8
- 天理参考館から (24)  
鯉織  
／幡鎌 真理…………… 9
- 2020年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ  
(6)  
第6講：103「間違いのないように」  
／堀内 みどり…………… 10
- おやさと研究所ニュース…………… 11  
新連載執筆のねらいと執筆者紹介／宗教  
社会学の会で研究発表／2020年度平和大  
学講座で基調発言／第13回宗教哲学会シ  
ンポジウムでパネリスト／ギリシア・アラ  
ビア・ラテン哲学会で研究発表／新刊紹介

## 巻頭言

### 聖と俗の分離

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

今少し、海外における天理教の本部拠点  
と教会のあり方について考察を続けたい。

日本国内において、天理教の教会には  
教会長家族が住んでいる。そして「住み  
込み」という慣習がある。大きな寺院な  
どと同様、若い信仰者などが言わば徒弟  
制度のように住み込み、日夜心身を鍛錬  
して信仰的成人を図っていくものだ。ま  
た信者家庭が共同生活している場合もあ  
る。

加えて、天理教独特と言えるかもしれな  
いが、過去に犯罪などの複雑な事情を抱え  
た人が教会に住み込んで、教会の人たちと  
寝食を共にしつつ更生していくというケー  
スが現在でもある。迎え入れる教会側は、  
彼らを言わば「拡大家族」として受け入れる。

この天理教の「住み込み」という制度を、  
明治時代、国が問題にしたことがある。全  
財産を持参して教会で共同生活をするこ  
とが不謹慎として、当局の取り締まりの対  
象となった。それほど、これは救済活動  
として各地でかなり活発に行われていた。

例えば1933年、河上肇ら共産党の幹部  
が検挙されたとき、特高のスパイのよう  
に働いた百瀬幸夫は、共産党からの攻撃  
に身の危険を感じ、世間から姿を消すよう  
に静岡県(1)の天理教の教会に匿われている。

また、すでに述べたように天理教の多  
くの教会は一般民家程度の広さであり、  
神殿などの公的な部分と家族の居住部分  
が分かれていないことも多い。言い換え  
れば聖と俗が混在している。参拝場にち  
やぶ台が置かれ子供のランドセルが転が  
っている状況は決して珍しくない。

しかし、教会がそのように完全なパブ  
リックな場所ではなく会長家族らの生活  
の場でもあることによって、所属信者と  
精神的にも濃厚な交流が可能になる面も  
ある。参拝に来た信者が、茶果を喫して  
帰るといったことも間々ある。いま日本で

里親を務めている人の中に、天理教教会の  
関係者が多いことも周知の通りである (短  
所としては、教会が生活の場でもあるの  
で初めての人が極めて入りにくいことも  
あるが)。聖と俗、言い換えれば公と私  
が別れていないことについて、そもそも教  
会長などは世間から超然とした位置にい  
るのではなく、「俗にいて俗に墮せず」(『天  
理教教典』)という教えもある。

海外でも、この形を踏襲している。ただ、  
一般的に教会というものが生活臭のないパ  
ブリックなものである海外で、その状態で  
「教会」を称するのは現地の人たちには非  
常な違和感があるだろう。キリスト教の参  
拝場内に牧師の子供の玩具が転がっていた  
り、夕飯の匂いが漂っていたりしたら、そ  
れだけで参拝者は身を引いてしまう。しか  
し面積的に狭小天理教の一般教会が、公私  
を完全に分けることは現実的に不可能だ。

さらに言えば、ただでさえ多くの国で  
は未だ日本人 (日系人) が非日本人に布  
教しているのである。現地の人たちの違  
和感は一層増す。事実、筆者の天理教ヨー  
ロッパ出張所 (在フランス) 在勤時、フ  
ランス人女性信者が約7年間住み込んだ。  
言わば「フランスの中の日本人コロニーの  
中にいるフランス人」という状況であり、  
様々な困難に直面した。

これらを考えると、ある程度の規模が  
あり公的な性格も有する海外の本部拠点  
のあり方が重要になってくる。つまり、そ  
こでは、可能な限り聖と俗のスペースを  
分けた方が良いのではないか。そしてそ  
の上で、住み込みを取ることを考えてみ  
てはどうだろうか。

[註]

1. 「神道天理教会所中に教師信徒等移住共  
同生活を為せる者ありたるとの報告方の  
件」明治35年5月2日内務省宗務局  
国立公文書館蔵。
2. 立花隆『日本共産党の研究 (二)』講談社  
文庫、1983年。